

原著

森ノ宮医療大学附属鍼灸施術所の受療患者統計 (2007～2020)

大川祐世¹⁾, 増山祥子¹⁾, 辻丸泰永¹⁾, 仲西宏元¹⁾, 山下仁¹⁾

¹⁾ 森ノ宮医療大学 保健医療学部 鍼灸学科

要 旨

森ノ宮医療大学附属鍼灸施術所（はり・きゅうコスモス治療院）の受療実態について分析し、当施術所の特色や課題を把握することとした。当施術所が開設された2007年から2020年3月末までの患者データが解析対象となった。2,333名（のべ治療回数39,176回）が来院し、女性1,327人（57%）、男性1,006人（43%）であった。初診時患者年齢の中央値（四分位範囲）は33（20-56）であった。初診時の主訴の内訳は「筋骨格系および結合組織の疾患」が2,432件（65.0%）で全体の大半を占め、「症状、徴候および異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの」が306件（8.2%）、「神経系の疾患」が290件（7.8%）と続いた。症状別にみると肩こりを中心とした頸肩背部の障害が930件（24.9%）、腰痛を中心とした腰背部の障害が794件（21.2%）と多かった。

キーワード：鍼灸，大学附属施術所，患者統計，臨床研究，医療連携

連絡先：大川 祐世 OKAWA Yuse

〒559-8611 大阪市住之江区南港北1-26-16

森ノ宮医療大学保健医療学部鍼灸学科

I. はじめに

森ノ宮医療大学附属鍼灸施術所（はり・きゅうコスモス治療院）は、2007年4月に大阪市住之江区南港地区に開学した森ノ宮医療大学の鍼灸臨床施設として同年10月3日に開設された。当初は大学棟内に開設され施術所入り口も学内に設けられていたため、周辺地域の患者からも当施術所を認識しにくい環境で開始されたが¹⁾、2011年の大学新棟竣工に伴って現在の場所へと移転し、施術所専用の入り口も設けられ、地域住民および近隣企業等の勤務者らにも認知されやすい環境となって再スタートをきった。

開設当初より、当施術所は教育機関としての役割を担ってきた。本学鍼灸学科2年次の附属施術所見学実習（2019年度より応用鍼灸実技IIにカリキュラム変更）、3年次の附属施術所基礎実習、4年次の附属施術所応用実習、大学院保健医療学研究科の専門演習において学生・大学院生を受け入れ、1年間を通して実習・演習を行っている。さらに2011年度からは卒後鍼灸師研修制度を開始し、鍼灸師教育も行ってきた。これまでに20名近くの鍼灸師が当施術所の研修を修了している。また、当施術所は地域住民および近隣企業等の勤務者のヘルスケアに貢献する施設としての役割も目指してきたが、開設後1年の患者集計¹⁾以来、詳細な受療患者分析が行われていなかった。そこで今回、2007年の開設から2020年3月末までの当施術所における患者の集計を行うとともに、他の鍼灸師養成施設が保有する鍼灸施術所における患者統計データや国民生活基礎調査データなどとの比較検討によって当施術所の特色を明らかにし、役割を再考するとともに、様々な課題についても考察を加えることとした。

II. 方法

1. 対象

解析対象期間は2007年10月1日から2020年3月31日までとし、当施術所において患者の来院記録を管理する“コスモス治療院来診受付記録”および患者の基礎情報を管理する“新患コスモス治療院患者データベース”の2つのMicrosoft Excel ファイルをもとに集計・解析をおこなった。

2. 解析方法

“コスモス治療院来診受付記録”および“新患コスモス治療院患者データベース”のそれぞれにおいてデータクリーニングを行った後、分類が必要なものに関してはICD-10コーディング（後述）作業を行い、単純集計またはクロス集計による記述統計にてデータ解析を行った。

3. 解析項目

3.1 患者受療実態

“コスモス治療院来診受付記録”より、2007年度（開院した10月から翌年3月まで）から2019年度までの患者受療実態を算出した。算出データは以下の通りとした。

- 1) 初診患者総数、治療総数およびそれらの年度ごとの推移
- 2) 各年度における患者区分別来院患者数

患者区分とは、新患登録の際に便宜上分類した「通常」、「提携施設」、「学園職員」、「学園学生」、「小児」（小学生以下）という区別のことである（2009年および2020年に一部変更）。

3.2 初診患者基礎情報

“新患コスモス治療院患者データベース”より、対象期間に来院した初診患者の年齢、性別、職業、居住地域、当施術所を知ったきっかけ、および初診時の主訴を集計・解析した。算出データは以下の通

りとした。

1) 初診患者の年齢および性別の特徴

初診患者の年齢の平均値（標準偏差）または中央値（四分位範囲）を算出し、また10年齢ごとの年齢構成別に階層化し、各年齢階層の患者数と性別割合を算出した。当施術所が大学附属機関であることから、来院患者の中で「学園学生」が高い比重を占め他の鍼灸施術機関に訪れる患者像との比較可能性が低められることが予想されたため、「学園学生」を含む場合と含まない場合の両方のデータを算出した。

2) 初診患者の職業の特徴

患者の職業ごとに実数と性別の割合を算出した。他の鍼灸施術機関との比較可能性を高めるため、当項目に関しては「学園学生」を含めずにデータを算出した。

3) 初診患者の居住地域の特徴

患者の住所から都道府県別に患者数を算出した。示すデータは近畿圏の各府県および大阪府下大阪市内・外の患者数とした。なお大阪市内の患者に関しては24区別に患者数およびその割合を算出した

4) 当施術所を知ったきっかけ

初診患者の当施術所を知ったきっかけを集計し、項目別に人数を算出した。

5) 初診時の主訴

初診時の患者の主訴を、国際疾病分類第10回改訂版（International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems-10、ICD-10）を参考にコーディングを行い集計・解析した。鍼灸師には診断権が認められていないため解析対象としたデータベースには診断名は含まれていない。したがって、ICD-10の分類においては、担当した鍼灸師が推定した患者の病態に対して、もしくは患者の訴えに対して直接的に、最も適応すると考えられる分類コードを著者（大川）の判断で付した。主訴が複数に及ぶ場合はそのすべてについてICD-10による分類を行い、のべ数で集計した。以上の方法で、ICD-10分類コード別の主訴数およびその割合を算出し上位10位までを示した。またICD-10分類コードに関係なく、受診頻度の高い症状または疾患群を上位5位まで算出した。

4. 研究倫理

研究の実施においては個人情報保護のため生データから匿名化処理を行った状態の解析用ファイル（Microsoft Excel）を作成し、データ解析を実施した。解析用ファイルからは個人が識別できないよう処理したが、万が一患者から個人情報の訂正および二次的利用の停止を求められた場合に対応できるよう、匿名化する情報には代わりに符号をつけて、匿名化処理されたデータから元の個人情報が復元できるよう対処した。

本研究におけるインフォームド・コンセントはオプトアウト形式を採用した。当施術所患者待合室に『当院における個人情報の利用目的と保護方針』（図1）を掲示し、既存資料の研究的二次利用についての情報公開を行い、患者の拒否権を保障した。本研究は森ノ宮医療大学研究倫理審査部会の承認を受けて実施した。（承認番号：2020-107）

当院における個人情報の利用目的と保護方針

当院は、患者さんの権利・利益を保護するために個人情報を適切に管理することに努めます。

1. 個人情報の収集・利用・提供

個人情報の保護に関する法律を遵守し、以下にお示しした利用目的の範囲内で個人情報の収集、利用および提供をさせていただきます。

1) 患者さんへの鍼灸施術に必要な利用目的

[当院での利用]

- ・鍼灸施術および生活アドバイス
- ・施術料の請求に関する事務
- ・サービスの質の向上、安全確保、医療事故等の分析・報告

[他の事業者等への情報提供]

- ・他の医療機関等への紹介または照会に対する回答（御本人同意のうえで）
- ・患者さんの施術に関して外部の医師等の意見・助言を求める場合
- ・ご家族等への病態や施術内容の説明（御本人同意のうえで）
- ・審査支払機関または保険者のレセプト提出、および照会に対する回答
- ・賠償責任保険などに係る専門団体や保険会社等への相談または届出等

2) 上記以外の利用目的

[当院での利用]

- ・医療・介護サービスや業務の維持・改善のための基礎資料
- ・医療従事者養成のための学生実習への協力
- ・臨床研究（関係する法令や指針に従います）
- ・治療経過の調査、満足度調査、および業務改善のためのアンケート調査

[その他]

- ・学会・医学雑誌等への発表（御本人同意のうえ匿名化して）
- ・法令にもとづく情報提供、あるいは緊急事態における照会に対する回答等

2. 個人情報の安全対策

個人情報への不正アクセス、個人情報の紛失、破壊、改ざんおよび漏洩などに関する万全の予防措置を講じます。万一の問題発生時には速やかなる是正対策を実施します。

3. 個人情報の確認・訂正・利用停止

当該本人（患者さん）等から内容の確認・訂正あるいは利用停止を求められた場合には、調査のうえ適切に対応します。

4. 個人情報保護に関する教育および継続的改善

個人情報保護体制を適切に維持するため職員の教育を徹底し、体制を継続的に改善します。

5. 診療情報の開示

ご本人の申し出により診療情報の開示を行います。

令和元年5月9日 森ノ宮医療大学 保健医療学部鍼灸学科
はり・きゅうコスモス治療院 院長
山下 仁

(お問合せ先 〒559-8611 大阪市住之江区南港北 1-26-16 電話 06-6696-6933)

図1 当院における個人情報の利用目的と保護方針

III. 結果

1. 患者受療実態

調査期間に来院した患者数は2,333人、女性1,327人（57%）、男性1,006人（43%）であった。治療回数はこのべ39,176回であった。各年度における初診患者数および、再診患者数の推移を図2に示した。2010年度以降は毎年3,000人以上が来院しており、その中でも2010年度は初診患者数、再診患者数ともに最も多かった（図2）。また図3には年度ごとの患者区分別来院患者数を示した。2007年度は本学園の学生を示す「学園学生」の区分が設けられていなかったため「学園職員」の区分に「学園学生」が含まれた。また2009年度からは「実習協力」患者区分が新たに設けられ、「通常」および「提携施設」患者の中で学生実習への協力が得られた患者はすべて「実習協力」患者として集計された。2009年度以降は「実習協力」患者数がすべての患者区分の中で最も多い結果となった。

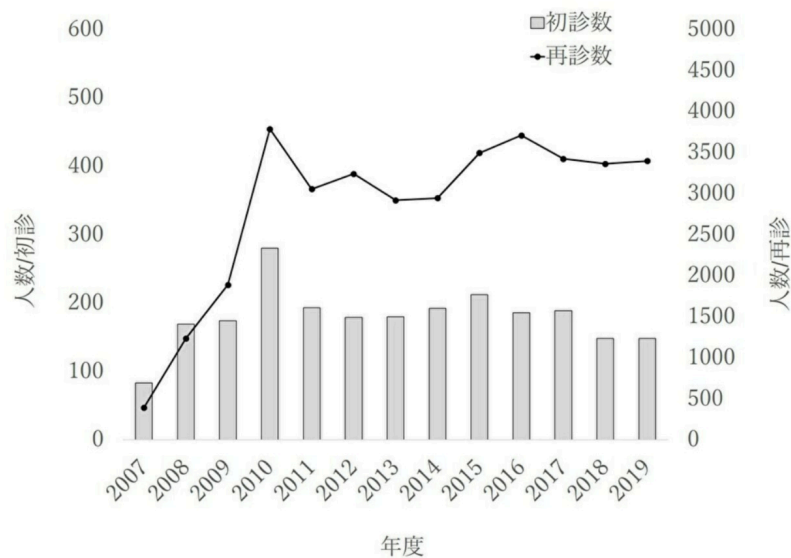


図2 各年度における初診患者数および再診患者数の推移方針

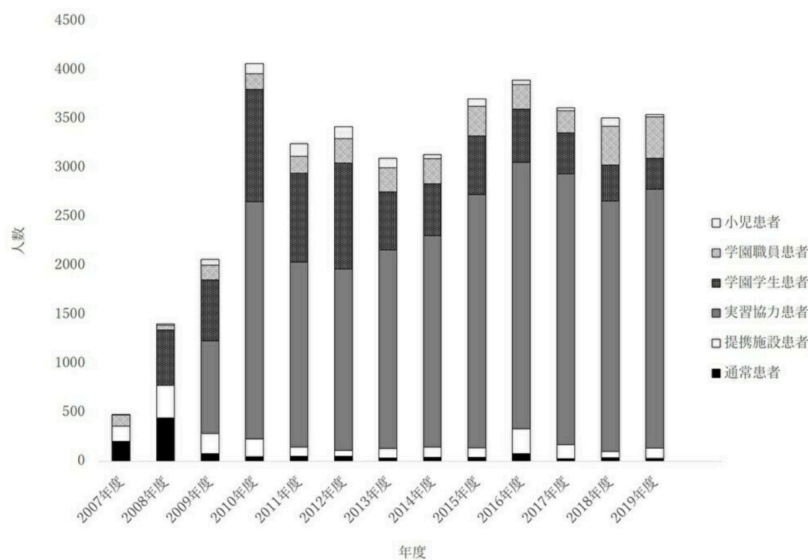


図3 各年度における患者区分別来院数の推移

2. 初診患者基礎情報

2.1 初診患者の年齢および性別の特徴

1人は年齢不明のため解析から除外され、2,332人が対象となった。初診患者の年齢の中央値（四分位範囲）は33（20-56）歳、最少年齢は0歳、最高年齢は93歳であった。その年齢構成別患者数と性別割合を図4に示す。本学学生も含めると10代、20代の初診患者が多い結果となった。また20代以下の年齢層では男女の割合が同等であったのに対して30代以上になるとすべての年齢層において女性の割合が高い結果となった。

学園学生を解析から除いた場合1,464人が対象となり、年齢の平均値（標準偏差）は49.1（±19.9）歳であった。その年齢構成別患者数と性別割合を図5に示す。最も多い患者層は60代で、50代、40代と続いた。すべての年齢層において女性の割合が高い結果となった。

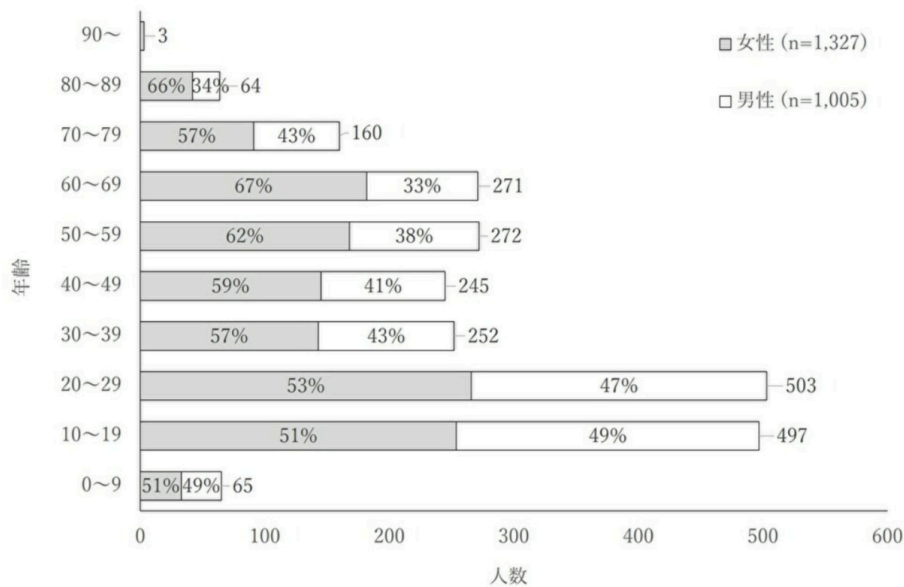


図4 本学園学生も含めたすべての初診患者の年齢構成別患者数および性別割合

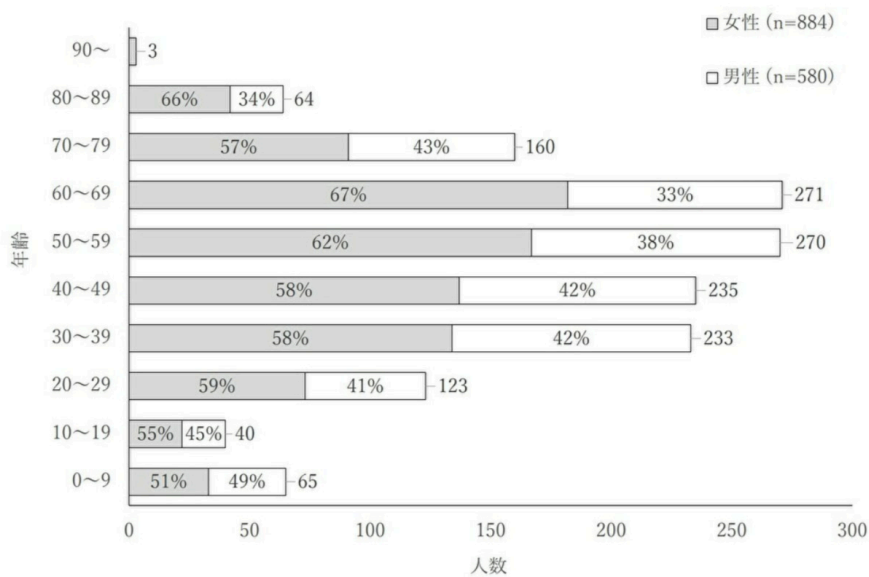


図5 本学園学生を除いた場合の初診患者の年齢構成別患者数および性別割合

2.2 初診患者の職業の特徴

学園学生を除くと、多かった職業順に会社員（283人）、主夫・主婦（226人）、無職（164人）であった（図6）。

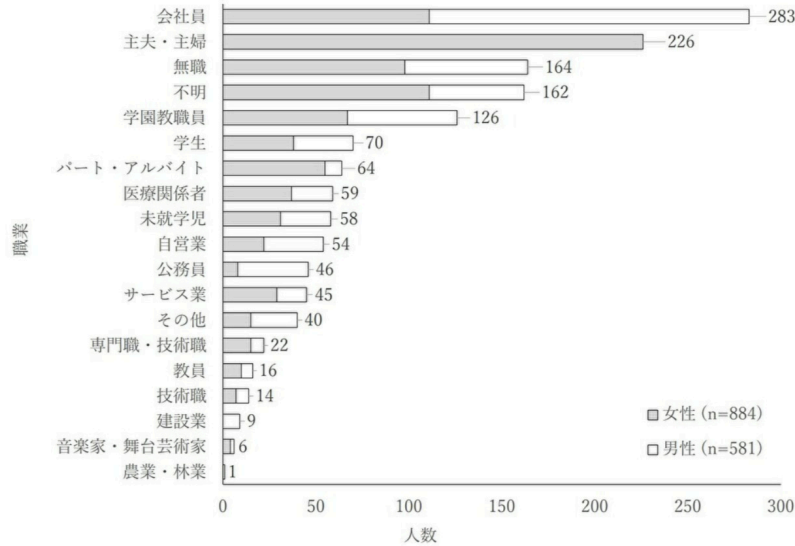


図6 初診患者のうち本学園学生を除いた場合の職業別患者数

2.3 初診患者の居住地の特徴

全国から患者の来院が見られたが、近畿圏外からの患者は37人で全体の2%にとどまった。近畿圏内では大阪府の1,870人（80.2%）に次いで兵庫県207人（8.9%）、奈良県146人（6.3%）、京都府41人（1.8%）の順に患者数が多かった。大阪府下においては大阪市内が1,254人（53.8%）、大阪市外が616人（26.4%）であった（図7）。大阪市内1,254人を24区別にみると、最も多かったのは住之江区からの患者で715人（57%）であり、以下港区90人（7%）、住吉区39人（3%）、平野区31人（2%）、中央区30人（2%）と続いた。当施術所が位置する住之江区からの患者が大半であり、隣接する港区、住吉区を合わせると市内患者の約7割にのぼった。

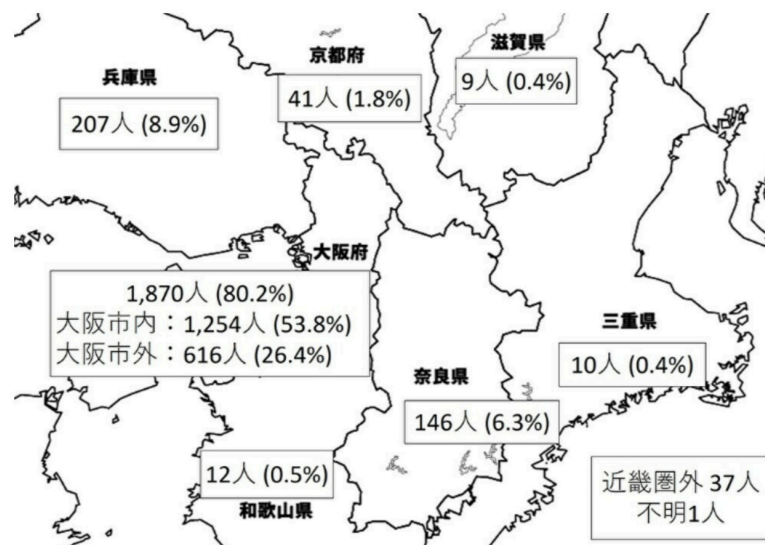


図7 近畿圏の各府県別患者数および大阪市内外での患者数の内訳

2.4 当施術所を知ったきっかけ

当施術所を知ったきっかけで最も多かったのは「紹介」で804人(34.5%)であった。次に多かったのは「学内」803人(34.4%)で、これには学園学生や学園職員患者が該当した。以下、大学ホームページ107人(4.6%)、看板・広告48人(2.1%)、近隣32人(1.4%)、通りすがり28人(1.2%)と続いた(図8)。

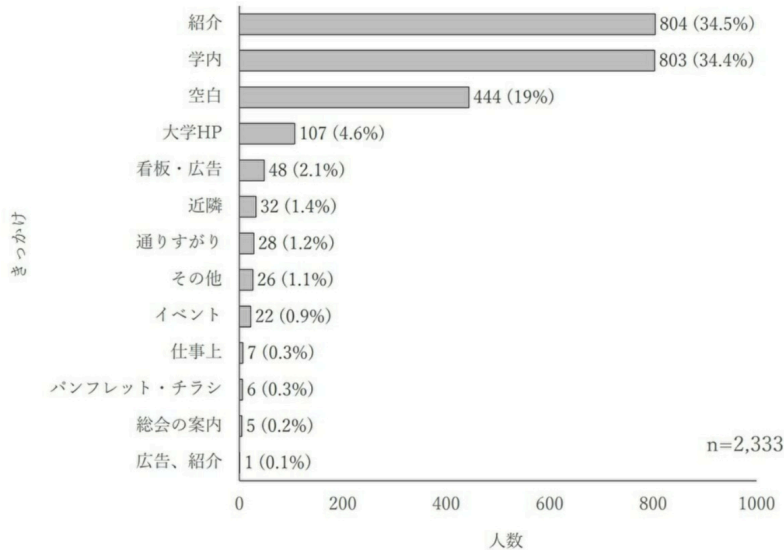


図8 当施術所を知ったきっかけ

2.5 初診時の主訴

初診時の総主訴数は3,740件であった。

1) ICD-10分類コード別の主訴数およびそれぞれの割合

ICD-10分類コード別にみると最も多い主訴は「筋骨格系および結合組織の疾患」で2,432件(65.0%)、全体の大半を占めた。続いて「症状、徴候および異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの」で306件(8.2%)、「神経系の疾患」290件(7.8%)であった(図9)。

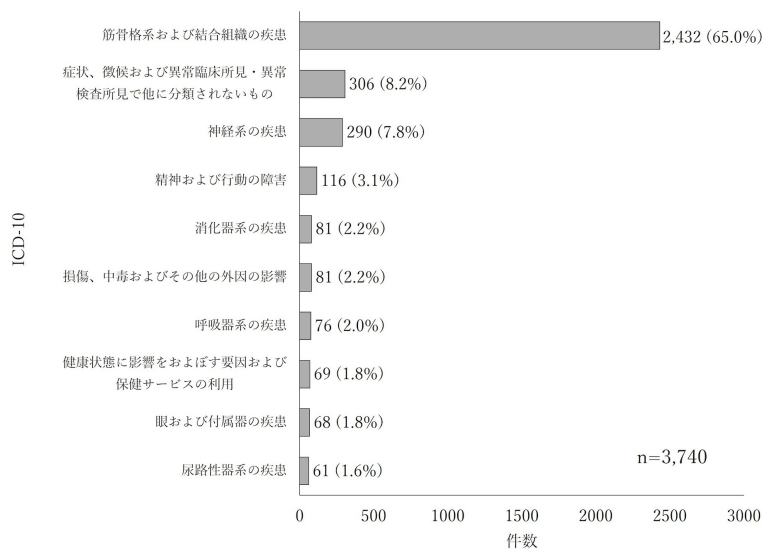


図9 ICD-10分類コード別の主訴数およびそれぞれの割合

2) 受診頻度の高い症状または疾患群（上位5位）

受診頻度の高い順に頸肩背部の障害 930 件（24.9%）、腰背部の障害 794 件（21.2%）、肩関節周囲の障害 197 件（5.3%）、膝関節周囲の障害 173 件（4.6%）、頭痛 109 件（2.9%）と続いた（図 10）。頸肩背部の障害の訴えの多くは頸肩こりで、腰背部の障害の訴えの多くは腰痛であった。

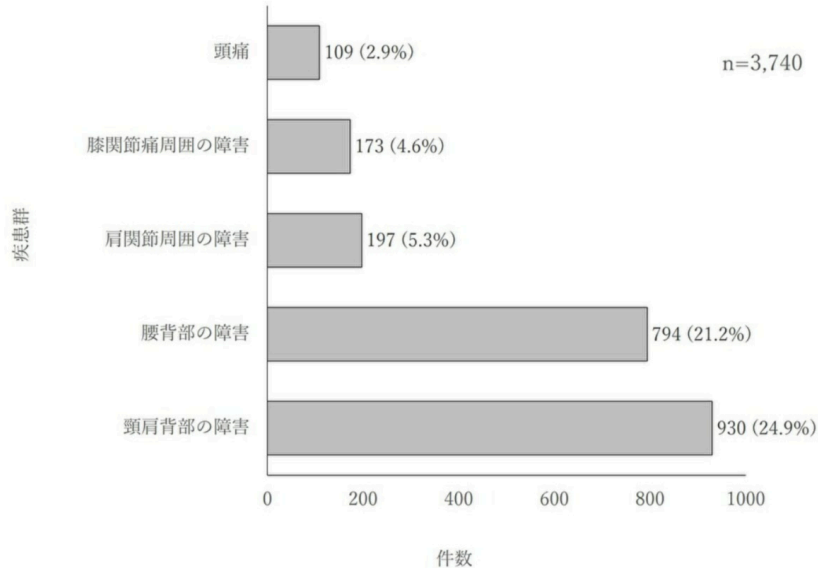


図 10 受診頻度の高い症状または疾患群（上位5位まで）

IV. 考察

1. 森ノ宮医療大学附属鍼灸施術所の患者受療実態および特徴

2007年10月から2020年3月までの期間で来院患者数は2,333人（女性57%、男性43%）で治療回数のはべ39,176回であった。初診患者の最少年齢は0歳、最高年齢は93歳と幅広くあらゆる年代の患者が来院しており、受療患者が多様である実態を示唆するものである。一方で当施術所が大学附属機関であることから患者の約40%が本学園学生で、そのために全患者における年齢の中央値は33(20, 56)歳と若く、他の鍼灸施術機関における患者像とは大きく異なる結果となった^{2,3)}。そこで、他施設との比較可能性を高めるため本学園学生を除いて集計した結果、患者年齢の平均値は49.1(±19.9)歳となり他施設が報告する患者平均年齢に近づいたが、それでもなお他施設よりも患者年齢層が低い傾向にあることが当施術所の特徴であった。このことは当施術所の立地条件、すなわち比較的若い世代が入居しているマンション群と隣接している（住之江区全体の平均年齢が47.6歳に対し南港北1丁目は40.4歳）ことが一因と思われる⁴⁾。一方、患者年齢層の違いはあるものの、来院患者の主訴を解析すると全体の65%が「筋骨格系疾患および結合組織の疾患」であり、これは他の鍼灸施術機関における患者像と同様であった^{2,3)}。症状または疾患群別にみると肩こりを中心とした頸肩背部の主訴が全体の約25%で、腰痛を中心とした腰背部の障害が全体の約20%であったことから、これまでの報告と同様^{5,6)}、鍼灸治療において患者来院の動機となるのは肩こり、腰痛が中心であることが改めてこのデータからも示された。

令和元（2019）年国民生活基礎調査によれば⁷⁾、男性では腰痛、肩こりの順に有訴者率が高く、女性では肩こり、腰痛の順に有訴者率が高いことから、腰痛、肩こりは日本国民の多くが抱える症状であるといえる。また同調査には最も気になる症状に対しての治療状況が示されており、腰痛、肩こりは他の症状に比べてあんま・はり・きゅう・柔道整復師（施術所）にかかっていると回答した者の割合が高い

(腰痛では全体の18%、肩こりでは21%)。特に肩こりに関しては「病院・診療所に通っている」が全体の24%であることから、現代医学的対処法と同程度の割合で鍼灸などの補完代替療法が利用されている^{8,9)}。また、当施術所において「筋骨格系疾患および結合組織の疾患」の次に多かった主訴は「症状、徴候および異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの」であり、現代西洋医学では診断名のつかないようないわゆる不定愁訴に分類されるものが多かった。以上のデータは、現代の医療システムの中で、鍼灸治療がある時は現代西洋医学を補完し、またある時は現代西洋医学に代わる形で共存し、国民のヘルスケアの向上に寄与する可能性を示唆するものであり、本学が目指す多職種連携によるチーム医療のなかで鍼灸師が果たす役割の一端を見出すものであると考えられる。

患者区分別にみると「実習協力」区分が設けられた2009年度以降、それまで「通常」および「提携施設」に区分されていた学外の一般患者の中で、学生実習に協力の得られた患者は全て「実習協力」患者として扱われた。その結果、各年度において実習協力患者が占める割合が最も高くなり、教育機関としての役割が患者にも認知され、またその役割を一定程度果たしてきたものとする。

患者の居住地域を見ると、近隣住民あるいは近接地区からの来院が多いことから地域のヘルスケアを担う施設としての役割を一定果たしたと思われる。一方で、大阪府下各地からの来院もみられたり、また大阪府以外の近畿各府県からも来院がみられたりしたことから、大学附属機関としての高度な専門性が求められていることも推測される。

2. 課題と今後の展望

矢野らの調査⁵⁾では日本国民の鍼灸の年間受療率は2018年時点で4.0%であり、信頼区間からみた有意差はないものの年々減少傾向にあることが示されている。しかしそれに反して鍼灸師の数も鍼灸治療を提供する施術所の数も年々増加しており、需要と供給のバランスが崩れている⁵⁾。このような状況下で大学附属臨床施設である当施術所が果たすべき役割について今一度考察し、本調査によって明らかになった当施術所の特色と課題から、それぞれに対する今後の方針案を提示したい。

2.1 臨床研究の実施および主導

当施術所は研究機関としての役割を有しながらも、これまで当施術所からの研究成果報告は数件にとどまっている。今後、臨床だけでなく研究機関としての役割を果たしていくためには一般の開業鍼灸院ではなかなか実施が難しい2群以上が設定された比較研究などを率先して実施していく必要性を感じる。

そこで研究の実現可能性や研究課題の重要性を考慮すると、当施術所において肩こりや腰痛など、受療患者が多いとともに全国的にも鍼灸治療の需要が大きいと思われる対象症状に対する臨床的有用性の検証を行う、鍼の比較試験が実施されるべきではないかと考える。結果の項で示した通り、当施術所の来院動機としても肩こり、腰痛が多いことから患者募集は比較的容易であることが予想され、実現可能性は十分にある。まずは単施設における鍼の有用性に関するパイロット試験を当施術所において実施し、将来的には多施設共同臨床試験を主導していく必要があると考えている。

2.2 医療連携と高度な専門性の発揮

筋骨格系疾患の患者が多数を占めることはほとんどの鍼灸施術施設においても共通するが^{2,3,6)}、来院患者の病態の多様性の欠如は当施術所の課題でもある。既に述べた通り、当施術所は教育機関としての重大な役割も担っていることから、学生あるいは研修生の臨床教育において多様な病態を経験させることができないということは大きな問題である。また難治性疾患への鍼灸介入の可能性を広めたり、新たな分野の開拓を牽引したりという役割も大学附属臨床施設としては求められるだろう。そこで図8に

示した来院患者の当施術所を知ったきっかけを参考に、当施術所が今後多様な病態の患者を扱っていくための戦略を考察する。当施術所においてホームページや「看板・広告」といった経費を伴う広報活動をきっかけに来院した患者は実際には全体の1割に満たず、最も割合が高かったのが「紹介」である。この「紹介」の中で大部分は当施術所患者からの紹介であるが、一部には医療従事者からの紹介もあった。今後はこの医療従事者からの紹介という点に注力していくことが重要である。なぜなら医療機関との連携を図り、双方向に患者紹介できる環境が整備されることが、多様な病態の患者獲得やまたそれらの患者への質の高いケアの提供につながると考えられるからである。そしてその結果が本学学生の臨床実習にも還元され、教育レベルの向上にも繋がることが期待される。そのために、まずは他の医療従事者に鍼灸を認知してもらわなければならない、その点においては上述した鍼灸の有用性のエビデンスの構築とも通じるが、それよりも患者紹介状を介した直接的なコミュニケーションなどの地道な努力により医療者間の信頼関係を築いていくことが最重要ではないかと考えている。

以上のように、市中の医療機関との連携により大学附属臨床施設としての高度な専門性を発揮していくことも重要であるが、地域医療を支える施設としても当施術所の果たす役割は大きい。2022年度には本大学附属クリニックが開院する予定となっており、当クリニックと当施術所が連携をとることで現代医学と東洋医学を融合させた医療の提供が可能となり、大阪市住之江区南港地区のプライマリケアを担う施設となることが期待できる。

3. 本研究の限界

本研究では当施術所における初診時患者情報、および来診記録を基に集計を行った。よって、患者属性の全体像を把握するための資料は提供されたものと考えているが、いくつかの分析において限界を含む。まずは初診時の主訴に関する分析についてである。方法の項で述べた通り、初診時の主訴に関してはICD-10に基づいて著者が単独で分類を行った。したがって、既に指摘されているような診断プロセスにおける種々のヒューリスティックや認知バイアスが本研究においても少なからず存在すると考えられる^{10, 11)}。そして、患者の症状の転帰については今回の分析の対象外となっている点である。よって当施術所が、あるいは鍼灸施術がどの程度ヘルスケアの向上に寄与できたのかを具体的に示すことはできなかった。

V. おわりに

本学森ノ宮医療大学に当施術所が開設されて十年以上が経過し、この度開設以降の患者統計を示すことができた。本調査結果からは当施術所がこれまで教育機関としての役割を果たしてきたこと、そして近隣住民あるいは近接地区住民のヘルスケアの一端を担ってきたことを垣間見ることができた。しかしその一方で、大学附属臨床施設としての見地に立った時、研究活動による学術的成果の発信、または医療連携による高度なケアの提供という点において改善の余地がみられた。次の十年はさらなる発展的な活動を展開していきたいと考える。

謝辞

森ノ宮医療大学附属施術所における患者情報を詳細、かつ正確に記録・管理いただいた鍼灸学科教員各位および歴代研修鍼灸師諸氏に深謝申し上げます。

利益相反

本研究の遂行および成果の公表において開示すべき利益相反はない。

参考文献

- 1) 辻丸泰永, 涌田裕美子, 増山祥子, 中村辰三, 倉林譲, 山下仁. 森ノ宮医療大学附属施術所開所後1年間の活動報告. 森ノ宮医療大学紀要. 2008; 1: 63-70.
- 2) 廣正基, 芳野温, 江川雅人, 越智秀樹, 岩昌宏, 片山憲史ら. 明治鍼灸大学附属京都駅前鍼灸センターにおける患者の実態報告. 明治鍼灸医学. 2006; 38: 9-18.
- 3) 福世泰史, 藤田格, 関真亮, 中澤寛元, 沢崎健太, 村上高康, 他. 臨床実習における来院患者の現状. 常葉大学健康プロデュース学部雑誌. 2020; 14(1): 159-161.
- 4) e-Stat. 国勢調査 / 平成 27 年国勢調査 / 小地域集計 27 大阪府. 2015. (www.e-stat.go.jp)
- 5) 矢野忠, 安野富美子, 藤井亮輔, 鍋田智之. 最も気になる症状 (国民生活基礎調査「健康票」) の治療であんま・はり・きゅう・柔道整復師 (施術所) にかかっている割合に関する調査 - 前編 -. 医道の日本. 2019; 78(10): 123-129.
- 6) 加藤竜司, 鈴木雅雄, 福田文彦, 加藤麦, 伊藤和之, 石崎直人. 鍼灸院通院患者の受療状況と満足度に関する横断研究. 全日本鍼灸学会雑誌. 2017; 67(4): 297-306.
- 7) 厚生労働省. 令和元年国民生活基礎調査の概況. 2019.
- 8) 厚生労働省. 令和元年国民生活基礎調査 第87表有訴者数, 最も気になる症状の治療状況(複数回答)・最も気になる症状・性別. 2019.
- 9) 矢野忠, 安野富美子, 藤井亮輔, 川喜田健司. 国民生活基礎調査「健康票」における「最も気になる症状」の治療に対するあんま・はり・きゅう・柔道整復師 (施術所) の利用状況 - 後編 -. 医道の日本. 2017; 76(5): 137-148.
- 10) 太田光泰. 臨床推論の認知心理学的背景とコーチングの方略. 横浜医学. 2018; 69: 37-45.
- 11) 青木洋介. How Doctors Think: 臨床医の診断思考過程のピットフォールを探る 代表的認知バイアス各論の紹介. 日本内科学会雑誌. 2019; 108(9): 1842-1846.

Patient statistics at Morinomiya University of Medical Sciences Cosmos Acupuncture Clinic (2007-2020)

Yuse Okawa¹⁾, Shoko Masuyama¹⁾, Yasunori Tsujimaru¹⁾,
Hiromoto Nakanishi¹⁾, Hitoshi Yamashita¹⁾

¹⁾ Department of Acupuncture, Faculty of Health Sciences, Morinomiya University of Medical Sciences

Abstract

We aimed to clarify the characteristic and problems of Morinomiya University of Medical Sciences Cosmos Acupuncture Clinic from patient statistics. Patient data between 2007 when the clinic was established and March 2020 were analyzed. 2,333 patients (total number of treatments: 39,176 times) visited our acupuncture clinic; 1,327 (57%) and 1,006 (43%) patient for females and males. The median (interquartile range) age of patients at the time of the first visit was 33 (20-56). The most common chief complaint at the time of the first visit was “Diseases of the musculoskeletal system and connective tissue”; 2,432 counts (65.0%). “Symptoms, signs and abnormal clinical and laboratory findings, not elsewhere classified”; 306 counts (8.2%), and “Diseases of the nervous system”; 290 counts (7.8%) were followed. Neck, shoulder and back disorders, mainly neck and shoulder stiffness was 930 cases (24.9%), back disorders, mainly lower back pain was 794 cases (21.2%).

Key words: acupuncture and moxibustion, university-affiliated acupuncture practice, patient's statistics, clinical research, medical cooperation

